



『ガザとは何か～パレスチナを知るための緊急講義』

岡 真理 著

大和書房 刊

定価 1,540円 (本体 1,400円+税)

イスラエルによるパレスチナ自治区ガザでの大量破壊や殺戮（ジェノサイド）に歯止めがかからない。ナチスによるホロコーストと同様の事態が、アメリカを後ろ盾にしたネタニヤフ首相率いるイスラエルによって進行し、200万人余りが飢え、死者だけでもすでに3万人を超えている。発端は、イスラム主義を掲げる民族解放組織「ハマス」が主導したイスラエルへの越境奇襲攻撃（昨年10月7日）だ。

「ハマス」は2006年の立法評議会選挙で勝利し、パレスチナの政権与党になったが、アメリカは「パレスチナ全土の開放」を掲げるハマスの政権を認めず、クーデターを画策して失敗する。パレスチナの人々が集住するガザはいま、アパルトヘイトを実行するイスラエルの占領下において完全に封鎖された「天井のない監獄」と呼ばれる。

そこへの大規模な無差別攻撃は、「袋のネズミ」状態に置かれているパレスチナの人々の大量虐殺にほかならない。「ハマス」をして「人間の姿をした化け物」と称するイスラエルの狂気は、かつてナチスがアウシュヴィッツなどの強制収容所でユダヤ人を大量殺戮した狂気に重なる人類の「恥」ではないか。

パレスチナの地でイスラエルの建国を強行したイギリスやアメリカの覇権的な植民地主義に端を発する中東紛争の歴史に終止符を打つことは容易でない。しかしただちにイスラエルの軍事攻撃を止めさせなければ、パレスチナの人々の命がさらに無差別に奪われる。本書はこの国も含め、世界の主要な企業メディアが「問題の根本」に触れようとしない現実に関心を抱き、「即時停戦」を求めて京都と早稲田の両大学で昨年秋に開催された「緊急講義」の記録だ。

著者は講義を引き受けた早稲田大学教授で、現代アラブ文学やパレスチナ問題の専門家だ。

さんかいの げん
(山海野 玄)